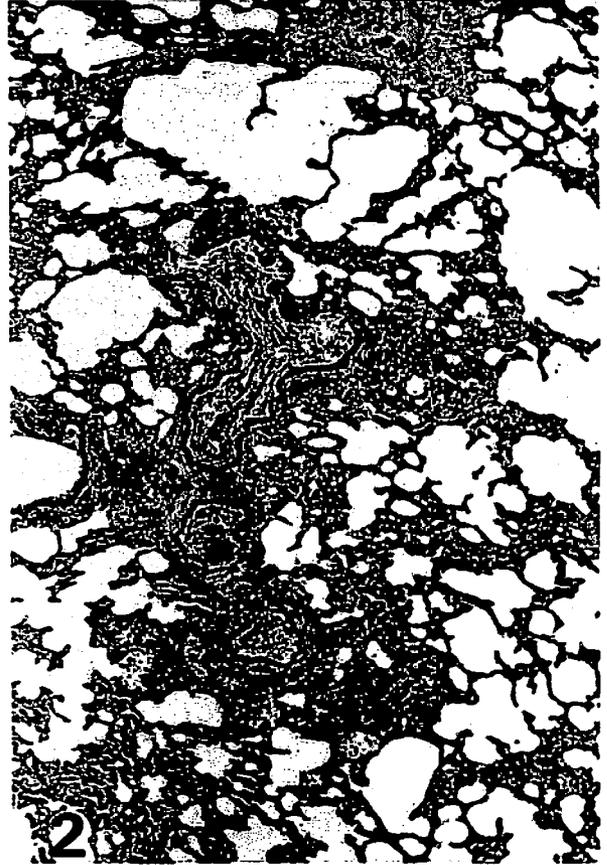


馬の肺

競走馬総合研究所病理研究室出題 第27回獣医病理学研修会提出標本No.475



動物：馬，ブルトン種，雌，9歳。臨床記録の詳細は不詳。分娩後，元気がなく剖検されるまでの約2ヵ月間，時折，微熱を繰り返していた。この間，肺にラッセル音が聴取され，呼吸器症状は次第に顕著となり，わずかな距離の移動でも努力性呼吸を呈し，呼吸時には季肋骨に沿って息労溝が認められるようになり，息労と診断され，安楽死処置された。

肉眼所見：肺は全体的に著しく退縮不全で，前葉及び後葉肋骨面に軽度の限局性肺気腫が認められた。断面では全葉性に細気管支の壁肥厚，内腔狭窄及び泡沫を混じた粘稠性滲出物の充填が認められた。他臓器では右心房心筋の肥大が目された。

病理組織所見：肺の主要組織所見は，1)小及び細気管支の粘膜上皮の過形成。2)同上皮の杯上皮化生(写真1，コロイド鉄ヘマトキシリン， $\times 142$)。3)細気管支から肺胞管の領域における，しばしば脱落上皮と好中球を含んだ粘液性滲出物の充填及び肺胞の過膨張と限局性肺気腫

(写真2，HE， $\times 28$)。4)小及び細気管支周囲におけるリンパ球とプラズマ細胞の浸潤等であった。

今回，特に小・細気管支から肺胞管における粘液栓形成が臨床症状と深く関わっていると考えられたことから，その病理発生を検討した。その結果，この粘液は杯上皮化生した小及び細気管支粘膜上皮から分泌されていた。また，組織学的検索によって，粘膜の大部分は酸性粘液多糖類であるsulfomucinとsialomucinから成り，極めて粘稠度の高い性質を有するとみなされた。一方，小及び細気管支内腔の絨毛は，杯上皮化生によって減少あるいは消失していた。さらに，気管支平滑筋は，しばしば水腫，空胞形成，筋線維の断裂及び融解が認められた。これら平滑筋の変性変化は，粘液の組織化学的性状に加え，粘液の排出を困難にすることが推察された。

病理組織学的診断：息労馬における肺胞性肺気腫を伴うカタル性細気管支炎。